中古語完了助動詞の非現実用法

井島正博

はじめに

筆者はこれまで、ヌ・ツ・タリ・リの意味・機能をアスペクト論の中で説明することが妥当である、という立場に与してきたが、研究史を振り返ると、そもそもそれらの意味・機能は、完了というような時間に関わるものとは言い難い、という有力な議論も見出される。そして、その根拠として挙げられるのが、非現実用法なのである。本稿では、非現実用法の存在が、本当にヌ・ツ・タリ・リの意味・機能をアスペクト論の中で説明することを不可能にすることになるものか、検討を加えたい。なお、第2、3節で用いる用例には主として『源氏物語』（本文は『日本古典文学全集』小学館（解釈も『全集』を参考にした）、索引には『源氏物語語彙用例総索引』勉誠社）を用いた。

1　非現実用法に関する研究史

ヌ・ツ（・タリ・リ）の意味・機能は、〝終わった・過ぎ去った〟というような時間に関わるものであるという認識は、近代以前から見出され、それを「過去」と呼ぶこともあった。

たとえば、富士谷成章『あゆひ抄』（一七七三）ではヌについて「「いぬ」といふ事をつづめて言へる脚結なり。「いぬ」とはここを去りてかしこにゆくを言ふ言葉なり。脚結にてもこの心を思ひわたすべし。したしくいはば、さはありがたからんとおぼゆる事の終に成りたるやうの心なり。」と述べる。ツについて詳しい意味記述はないが、キとの意味の近さを指摘している。本居宣長はヌ・ツに下接する助詞・助動詞の共通性、上接する動詞の種類の相違というように、客観的に観察できる特徴について指摘はしているが、意味・機能に関しては慎重にも発言を控えている。しかし、そ

れ以後の研究者はさまざまな意味・機能説を展開する。林国雄『詞緒環』（一八二六）は、「過去・現在・未来」という術語を用いて、一旦は「つら〳〵考ふるに、つ〖つ〗は過去なり。ぬ〖ぬ〗は現在なり。」と言うが、それをさらに「〖つ〗は過去の方より現在の堺にいり、ぬ〖ぬ〗は現在の方より過去のさかひに至」ると敷衍する。それに対して、黒沢翁満『言霊のしるべ』（一八三三）は一見逆に「つは今まのあたりの心、ぬは少し過去りし心ばへあり」と言うが、両者の違いについてはここでは問題にしない（この点については井島（二〇〇七・一一）で議論した）。大国隆正『神理入門用語訣』（一八六七頃）でも「いままでのことは、しとげて、よそにうつりゆくこころより、つといひ、ぬといふものになん」と述べている。

近代に入っても状況に変わりはないが、近世までは種々の助動詞が個々に論じられていたものが、近代になるといくつかの類型にカテゴリー化されるようになる。そうなると、ヌ・ツ・タリ・リはキ・ケリとともに過去助動詞として一括されることが多くなり、「過去」というカテゴリーに分類されることが明確に示されるようになる。

たとえば、田中義廉『小学日本文典』（一八七四・一）には、あまり明確な議論ではないが、「動詞の時限（＝時制）」のうち「過去」にタリ、「半過去（第二現在）」にキ・ヌが挙げられており、中根淑『日本文典』（一八七六・三）では、「充分過去」としてケリ・キ、「不充分過去」としてヌ・ツ、「充分現在」としてタリが挙げられている。さらに物集高見『初学日本文典』（一八七八・七）では、「過去辞」の中で、キ・ケリの他、ヌ・ツ・タリも「過去」を表わしているが、ニキ・テキと重なると「大過去」、さらにタラム・タラマシと重なると「想像過去」を表わすと論じている。大槻修二『小学日本文典』（一八八一・五）では、キ・ヌ・ツを「過去」と呼び、ケリ・タリ・セリ（リ）も「過去」とするが、ただしそれぞれキ－アリ・テ－アリ・シ－アリの略した形であると論じる。また、大槻文彦『語法指南』（一八九〇・一〇）では、ツ・ヌ・タリを「第一過去」、ケリ・キを「第二過去」、両者の重なったテケリ・ニケリ・タリケリ・テキ・ニキ・タリキを「第三過去」と呼んでおり、高津鍬三郎『日本中文典』（一八九一・六）はこれをそのまま受け継ぎ、落合直文・小中村義象『中等教育日本文典』（一八九二・三）では、キは「今日より昨日のことをいひ、本年より昨年のことなどをいふをりに、用ゐる」「全過去」、ヌ・ツは「現在に近き過去に用ゐる」「半過去」であり、タリは「過去の現在に残るに用ゐ」、ケリは「過去の事を今見聞して、驚嘆するに用ゐるもの」であると論じる。さらに、秦政治郎『皇国文典』（一八九三・八）の「過去格」の項では、リ・タリ・ヌ・ツを「仮過去」、キ・

ケリを「中過去」、両者が重なったものを「本過去」と呼ぶ。大槻文彦『広日本文典』（一八九七・一）では、『語学指南』と本質的には変わりはないものの術語を変えて、キ・ケリを「過去」、ヌ・ツ・タリ・リを「半過去」と呼び、ツ・ヌ・タリ・リにキ・ケリが承接したものを「大過去」と呼ぶ。落合直文『日本大文典』（一八九七・八）ではそれらを区別することなく、ツ・ヌ・タリ・ケリ・キをともに「過去の助動詞」と呼び、ツ・ヌ・タリとキ・ケリとが重なる場合は、「大に過去の意を強くするもの」であり「全過去」となると言う。このような議論は、「完了」というカテゴリーが提起された後もしばらく続き、藤井錢『日本文典』（一九〇〇・一二）では、ヌ・ツ・タリを「小過去」、ケリ・キを「中過去」、ヌ・ツ・タリとケリ・キが重なったものを「大過去」と呼び、和田萬吉『日本文典講義』（一九〇五・一二）では大槻文彦の「第一過去」、「第二過去」、「第三過去」をそのまま踏襲している。

「完了」という術語は、三土忠造（みつち）『中等国文典』（一八九八・四）の中で最初に用いられたという（佐藤良雄（一九六二・一二）・高橋太郎（一九七六・五）の指摘による）。「完了」という術語の導入は、単に名称だけの変更に留まらず、キ・ケリの属す「過去」というカテゴリーとは別に、新たに「完了」というカテゴリーが立てられたことを意味し、ナム・テム・タラムなどを未来完了というように説明することを可能にするものであった。

さて、三土は欧米語の文法に対応させて、「現在を表すには、助動詞を要せず。過去、未来を表すには、べつに助動詞を用ふ。**む**は未来の時に用ひ、**きけり**は過去の時に用ふ。故にこれ等を時の助動詞といふ。」というようにまず時制を論じ、その後に「「書を読みつ」「宿題の説明を了りぬ」「上野の花も咲きたり」の如きは動作の今方に完了したる意なり。この如きを現在完了といふ現在完了の時を表す助動詞は**つ ぬ たり**の三つなり。」と（現在）完了をたてる。

その後はそれが定着したようで、松平圓次郎『新式日本中文典』（一九〇一・五）では、ツ・ヌ・タリ・リを「完成ノ助動詞」、キ・ケリを「過去ノ助動詞」と呼び、芳賀矢一『中等教科明治文典』（一九〇五・二）でも「(イ)雨やみたり　(イ)雨やめり　(ロ)雨やみき　(ハ)雨やまん　(ニ)雨やみたりき　(ホ)雨やみたらん」という用例を挙げて、「(イ)は動作の今方に終れることを示す。故に現在完了の時といふ。(ロ)は動作の過去に終りしことを示す。之を過去の時といふ。(ハ)は動作の未来に起こるべきことを示す。之を未来の時といふ。(ニ)は完了の時と、過去の時と重なりたるもの。(ホ)は完了の時と、未来の時と重なりたるものにて即(ニ)は過去のある時に於て、(ホ)は未来のある時に於て、動作の已に完了せることを示す。故に過去完

了、未来完了の時といふ。是に於て動詞の時には左の六種の区別があることを知る。」というように踏襲される。

さらに、三矢重松『高等日本文法』（一九〇八・一二）でも、「定時（＝時制）」を「記述説話をするに、或る一定の時を標準としてその範囲内の動作を現在とし、其より前のを過去とし、後のを未来とす。」のように定義して、キ・ケリは過去であると論じる。そしてそれとは別にヌ・ツ・タリ・リ（および現代語のタ）を「完了態」、タリ・リ（およびアリ・ヲリなどと現代語のテヰル）を「存在継続態（進行態）」と呼ぶ。そのうち完了態については「動作の完了せるを表す一つの態なり。（完了せしにあらず）例へば「今手紙を書いた」といへば「書ク」といふ動作の完了せるを表せど、其の動作の過去にありしをいふにあらず。故に現在時を表す副詞「今」ありて、時は現在なり。又「手紙を書く」といへば「書く」といふ動作は現在なれど、単に「書ク」といふ動作あるを表すのみにして、「書キ出ス」か「書イテ居ル」か等の意を明にせず。かく等しく時は現在なれども、語の相違あるは其の言ひなし方、即態の異なるに因る。又「昨日書イタ手紙ヲ今日郵便ニ出シタ」といふ「書イタ」は等しく「タ」なれども、文語にては「シ」と云ふ処にて過去に属し、「出シタ」は此の完了なり。口語にては過去の助動詞なく、完了の「タ」を借りて用うるより、過去と完了との区別極めて立てにくけれども、文語にては明瞭なる区別あり。一たび之を思ひ明らむる時は更に紛ふべき節なし。心を潜めて思考すべし。」というように論じて、過去と完了との区別を強調する。吉岡郷甫『文語口語対照語法』（一九一二・七）でも、タリ・リを「存在時及び進行時」、ツ・ヌを「完了時」、キ・ケリを「過去時」とし、それらが複合したリキ・リケリ・タリキ・タリケリを「存在的過去時及び進行的過去時」、テキ・テケリ・ニキ・ニケリを「完了的過去時」と呼ぶ。

そのように一旦〝完了〟概念が了解された段階で、改めてヌ・ツ（・タリ・リ）が果たして本当に〝完了〟を表わしているのか、という問題設定をすると、問題に誠実に向き合った研究者ほどヌ・ツ（・タリ・リ）は〝完了〟を表わしているとは言えない、という結論にたどり着くことになったと思われる。そのような結論に至らざるをえない最も大きな要因が、本稿で問題にしたい完了助動詞の非現実用法の存在である。どのような点が、ヌ・ツ（・タリ・リ）の意味・機能を〝完了〟と呼ぶことを避けさせてきたのかを、研究史をたどりながら確認しておきたい。

そのような議論を最初に尖鋭的に提出したのは山田孝雄『日本文法論』（一九〇八・九）である。山田は最初に結論として「「つ」は其事実状態を直写的に説明するものにして、その事実状態が文

主によりてあらはさるゝことの確めを主者自らの側より直写的にあらはすなり。」「之に反して「ぬ」は傍観的に其の状態動作を説明して其の動作状態の確めをあらはす。」と論じる。その主旨は、一方では、ヌ・ツ（・タリ・リ）の意味・機能は、過去（山田は「回想」と言う）とは区別すべきものであり、他方では、それらは現象的には〝完了〟を表わしているように見えるが、本質的には「陳述の確め」に関するものである、ということである。すなわち、「かの回想をあらはす「き」は其営為せられたる事の何時にありしかをとはず現在の意識にては既に過去時に属せる時に営為せられたることを回想して其の回想せることをあらはすなり。「つ」「ぬ」は其の営為せることがなほ強く知覚内に活動せるが、しかも其の事実は既に完結せることを示す。」と言う。

しかしなぜ「完了」と言うのでは本質的ではなく、「確かめ」と言わなければならないのか。それにしても、ここで言う「確かめ」という概念の理論的位置付けが明確でない。あるいは、現代の文法理論で言えば、ムード（モダリティ）レベルにあるということになるのだろうか。しかし、ムードがテンスより上のこのような位置にあるのは不自然である。この問題を考えるためには、山田が「確かめ」という文法概念を立てなければならないと考える根拠を検討する必要がある。そこで挙げられている根拠は以下の三点である。

第一、この複語尾は決して完了の事実をのみのぶるにあらずして吾人の思想内にあらはれたるものをのぶ。たとへば

雨ふりぬべし。ほとくしく舟を覆しつべし。

などの「ぬ」「つ」は決して事実の完了をあらはさざるにあらずや。

第二、未顕の事実を仮説的にあらはすことあり。

雨ふりなば、逢ひみてば慰むやとぞ思ひしに。

などは決して完了の事実にあらざるなり。然るに事実の完了をあらはす詞といふによりてこの「なば」「てば」の如きものを説明するに窮せざるもの未曽て一人もあらざりしなり。

第三、予想予期せることをあらはす事あり。

頼めこし言の葉今はかへしてむ。

心は花になさばなりなむ。

の「てむ」「なむ」は如何、それ亦完了せる事実ならぬは明なり。

ここに挙げられている根拠は、いずれも本稿で言う完了助動詞の非現実用法である。そうであるなら、これらの非現実用法も〝完了〟と言うことができるようになれば、ヌ・ツ（・タリ・リ）の意味・機能を理論的位置づけの不明確な「確かめ」などと呼ばず

に、「完了」（と典型的に呼ばれるアスペクトのレベル）に位置付けることができることになる。

さてその後も、一方でヌ・ツ（・タリ・リ）の意味・機能を、あまり深く考えることなく最初から〝完了〟であると断ずる議論も絶えないが、時枝誠記『日本文法　文語篇』（一九五四・四）では山田説を承けて、「「つ」は、「ぬ」「たり」「り」とともに、実現の確定的と考へられるやうな事実の判断に用ゐられる。」というように論じており、現在の学校文法で、ヌ・ツの意味を時間関係としてとらえられる「完了」と、そのようにとらえることのできない「確述（強意）」とに二分する背景をなしているものと思われる。

ここで、ナム・テム・タラムなどに関しては、「確かめ」という概念を持ち出さなくても、テンスとアスペクトとが分離された段階でなら、未来（テンス）における完了（アスペクト）であるというように、時間関係としての説明が可能である。実際、近代の初めから、ムは「推量」モダリティに配属される一方で、「未来」テンスにも属させる文法書が多く見られる。

たとえば、テンスとアスペクトとが分離される以前なので、説明に矛盾があるのは仕方がないとして、大槻文彦『語法指南』（一八九〇・一一）にもそのような議論が見られる。

未来ハ、未ダ起ラザル動作ヲイフモノニテ、助動詞ノむ、ヲ用ヰル、「押サむ、」受ケむ、」生キむ、」ノ如シ。

又、第一、第二、第三過去、共ニ、其動作ハ、過去ナルベキヲ、推測シテ未来ニイフコトアリ。即チ、

第一過去ニテハ、つ、ぬ、たり、ノ第四変化ナル、て、な、たら、ニ未来ノむヲ重ネテ、「押シな、む、」押シたら、む、」受ケて、む、」受ケな、む、」受ケたら、む、」ナドイフ。

特にこのような立場を強く主張したのは、松尾捨治郎『国語法論攷』（一九三六・九）である。そこでは、完了助動詞に推量助動詞（ム、ベシ）が下接する場合について、推量助動詞は〝未来〟テンスを表わし、完了助動詞は〝完了〟アスペクトを表わしているのであって、完了助動詞が裸形やキ・ケリを下接して、事実内容を表わしている場合と機能が異なるわけではないことを特に強く主張した。

然らば此の完了の未来と普通の未来との差は何処にあるかといふに、

少し秋風立ちなむ時必ずあはむ。　（伊勢）

吾が恋ひし事も語りて慰めむ君が使を待ちやかねてむ。　（万葉十一）

海の底沖つ白浪立田山何時か越えなむ、妹があたり見むと。　（万葉一）

ゆかしきもの見せ給へらむに御志の程は見ゆべし。（竹取）

右の てむ なむ らむ は完了の未来であつて、之を或一つの普通未来に比較すると、其の普通未来時に於て、すでに完了すべきことを、現在から予めいつたものである。但し他の普通未来に比すれば、其より後になることもある。其等の普通未来は、必ずしも其処に書き記されて居るとは限らないが、時によつては記されて居ることもある。前掲の例についていへば、待ちやかねてむの待ちかぬることは慰めむの慰むることよりも前であり、ゆかしき物見することは志の程見ゆるよりも前である。立ちなむ 越えなむ も同じ趣である。しかし之等を未来全体の前即ち未来と現在との中間と見るのは誤である。

松尾（一九三六・九）では、ム・ベシの働きを〈未来〉テンスと割り切り、そのために過去（キ・ケリ）― 現在（Φ）― 未来（ム・ベシ）というテンス体系と、ツ・ヌ・タリ・リというアスペクト体系とを截然と分けた議論をすることができた。未実現の未来においても、完了助動詞が過去・現在における事実描写と同じ働きをしている、という指摘は貴重であるが、ム・ベシの働きが〈未来〉テンスであると論じるのは割り切りすぎである。

以上のように、一方では、ヌ・ツ（・タリ・リ）の意味・機能を「確かめ」のような文法理論的な位置付けの不明確な概念で説明するのでなく、また他方では、ム・マシのような推量助動詞の意味・機能を〝未来〟テンスであるというように単純化するのでもないような理論的説明を試みることが以下の課題である。そしてその問題を究明する中心に位置するのが、本稿で扱いたい完了助動詞の非現実用法なのである。

2　推量・仮定表現中の完了助動詞

以上のような問題意識のもとに、完了助動詞の非現実用法がどのように分布しているかを最初に概観しておきたい。完了助動詞の非現実用法は、一方では完了助動詞が推量助動詞（ここではとりあえず伝聞推定のナリも含める）に上接する場合、他方では完了助動詞の未然形にバ、終止形にトモが承接して（順接／逆接）仮定条件節を構成する場合に典型的に見られる（図表一）。

	ム	ラム	ケム	マシ	ベシ	メリ	ラシ	ナリ	バ	トモ
ヌ	402	44	32	41	480	13	1	6	61	5
ツ	163	93	4	23	151	0	0	0	4	2
タリ	204	0	18	9	16	31	0	27	26	6
リ	68	0	4	5	1	1	0	0	3	1

図表一

ただし、ここに示したすべての用例中で完了助動詞が非現実用法を表わしているわけではない。これらの完了助動詞＋推量助動詞ないし完了助動詞＋接続助詞という、形態的な観点からの分類を、さらに文法的な用法によって分け直さなければ非現実用法と呼ばれる用例を特定できない。

そこで、ここに示した用例を、さらにそれぞれを文法的な用法ごとに分けてみる。ただし、分けるに当たっては、いくつか留意した点がある。まず、終止用法に関しては、単に終止形終止（文末以外にも、終助詞のあるもの、引用されたもの（ト、ナドによる）も含む）の他、係り結びによる連体形・已然形終止の例も含まれる。準体用法に関しては、ハ、モ、ガなどの助詞を伴うものの他、無助詞のものも含まれる。接続用法に関しては、已然形＋バ、ド（モ）の他、連体形＋ニ・ヲのものも含まれる。仮定用法に関しては、助動詞ごとに事情が異なり、ベシについてはベク＋ハ、マシについてはマシカ＋バの用例のことであり、ムについて連体・準体の用例はおよそ仮定の意味となるが、連体・準体に含められている。またベシやメリはさらに過去・完了あるいは推量助動詞を下接する（メリにはナル－メリもある）ものがあるが、これらは下接する助動詞を示すのみに留め、それらがさらにどのような用法を持つかまでは示していない（図表二―a～h）。

	リ	タリ	ツ	ヌ
ム	終止	17	41	148	300
	連体	34	135	8	56
	準体	7	6	4	23
	接続	10	22	2	22
	ムトス	0	0	1	1
計		68	204	163	402

図表二－a

	リ	タリ	ツ	ヌ
ラム	終止	0	0	75	42
	連体	0	0	8	0
	準体	0	0	2	2
	接続	0	0	4	0
	挟みこみ	0	0	4	0
計		0	0	93	44

図表二－b

	リ	タリ	ツ	ヌ
ケム	終止	2	2	3	22
	連体	1	9	0	8
	準体	0	2	0	1
	接続	1	0	1	1
	挟みこみ	0	5	0	0
計		4	18	4	32

図表二－c

	リ	タリ	ツ	ヌ
マシ	終止	0	4	19	31
	仮定	5	5	4	10
計		5	9	23	41

図表二－d

					リ
ベシ	終止	84	18	14	0
	連体	181	58	2	1
	準体	8	2	0	0
	接続	71	7	0	0
	仮定	7	2	0	0
	連用	68	38	0	0
	マシ	1	0	0	0
	ム	4	5	0	0
	メリ	31	3	0	0
	キ	12	6	0	0
	ケリ	10	12	0	0
	ツ	3	0	0	0
計		480	151	16	1

図表二－ e

					リ
メリ	終止	5	0	13	0
	連体	0	0	1	0
	準体	0	0	3	1
	接続	6	0	10	0
	キ	2	0	4	0
計		13	0	31	1

図表二－ f

					リ
ラシ	終止	1	0	0	0
計		1	0	0	0

図表二－ g

					リ
ナリ	終止	5	0	17	0
	連体	0	0	1	0
	準体	1	0	9	0
計		6	0	27	0

図表二－ h

このうち、ラム、ケム、メリ、ラシ、ナリについては、何らかの意味で推量（および伝聞推定）を表わしているとはいっても、当該の事態の生起が想定されているのは現実の時間である。たとえば(1)aは源氏が末摘花を長年疎遠にしていたので薄情者と思われただろう、という現在の状態、(1)bは女三の宮は柏木からの手紙を源氏に見つからないように隠したはずだ、という過去の出来事、(1)cは源氏が末摘花を訪ねて行って車から降りたので折からの雨でぐっしょり濡れてしまったようだ、という現在の眼前の様子、(1)dは源氏自身も年をとったのでかつてのうら若い舞姫も年をとって神さびただろう、という現在の状態をそれぞれ推量しており、(1)eは式部卿宮家と鬚黒大将とのいざこざで帝も源氏のことを面白くなく思っているようだ、という現在の様子の伝聞を表わしている。このように、現実世界において働く推量を「現実推量」と呼ぶことにしたい。

(1) a　（源氏は）年ごろさまざまのもの思ひにほれぼれしくて（末摘花を）隔てつるほど、つらしと思はれづらむと、いとほしく思す。　蓬生　二・342

b　（小侍従は源氏に）御粥などまゐる方に目も見やらず、「いで、さりとも、それにはあらじ。いといみじく。さることはありなんや。隠いたまひてけむ」と思ひなす。

若菜下　四・241

c　雨そそきも、なほ秋の時雨めきてうちそそけば、惟光「御かささぶらふ。げに木の下露は、雨にまさりて」と聞こゆ。（源氏の）御指貫（さしぬき）の裾はいたうそぼちぬ＝めり。

蓬生　二・338

d　源氏をとめご（五節の舞姫）も神さびぬ＝らし天つ袖ふるきき世の友（源氏）よはひ経ぬれば　少女　三・57

e　大臣の君（源氏）、（紫の上を）いとほしと思して、源氏「難きことなり。おのが心ひとつにもあらぬ人のゆかりに、内裏（帝）にも心おきたるさまに思した＝なり。…」

真木柱　三・372

このように、終止形承接のラム、メリ、ラシ、ナリおよび連用形承接のケムが除かれ、非現実用法が見出しうるのは、未然形承接のム、マシおよび終止形承接のベシの一部に限られることになる。すなわち、ム、マシそれからベシの一部は現実とはまったく異なった非現実の世界での事態に関して用いられる場合があるということであるが、このような推量を「非現実推量」と呼ぶことにしたい。ただし、すべての用例が非現実推量を表わしているわけではない。

まず、ムの終止用法と接続用法とは、意志・勧誘表現なども含んではいるが、非現実推量の用例も多く見出される。たとえば、

(2) aは、返事をしなかったら末摘花はきまりわるく思うだろう、

(2) bは、そのうちには紫の上にきっと会うことができるだろう、

(2) cは、夕顔の死のことを自然に漏らしてしまうに違いない院の留守居役の縁者も出入りすることだろう、ということであり、あえて現実の時間に定位すれば未来ということになるが、未来の事態は不確定であり、また事実として経験されたことではありえない。そういう意味で、未来のことは非現実事態であると言うことができる。ひいては完了助動詞も現実の時間の延長としての未来を基準としてとることはできないことになる。

(2) a　源氏「（末摘花に）返り事は遣はせ。はしたなく思ひな＝む。父親王のいとかなしうしたまひける思ひ出づれば、人におとさむはいと心苦しき人なり」と聞こえたまふ。

行幸　三・306

b　大殿（致仕大臣の邸）の若君（夕霧）の御ことなど（紫の上の手紙に）あるにも、（源氏は）いと悲しけれど、おのづからあひ見て＝ん、頼もしき人々ものしたまへば、うしろめたうはあらずと思しなさるるは、なかなかこの道のまどはれぬにやあらむ。

須磨　二・185

c　惟光「この院守などに聞かせむことは、いと便なかるべし。

この人ひとりこそ睦ましくもあらめ、おのづからもの言ひ漏らしつべき眷属もたち交りたらむ。まづこの院を出でおはしましね」と、言ふ。　夕顔　一・245

このことは、意志・勧誘表現にも同様にあてはまる。(3)aは、夕顔が、山里に移ってしまおう、と考えた、(3)bは、薫が、差し支えがなかったら春頃に浮舟を今新築中の邸にお移ししよう、と思った、(3)cは、小君が、この障子口に私は寝ていよう、と思ったということを表わしており、こちらもあえて現実の時間上に定位すれば未来ということになるが、むしろ現実の時間上には定位しがたい非現実事態であると言う方が自然であろう。ちなみに、意志・勧誘と事情の近い希望・願望表現中の完了助動詞については、第3・2節で論じる。

(3) a　(夕顔は)それもいと見苦しきに住みわびたまひて、山里に移ろひなんと思したりしを、今年より塞がりける方にはべりければ、違ふとて、あやしき所にものしたまひしを見あらはされたてまつりぬることと、思し嘆くめりし。　夕顔　一・260

b　薫「…(薫と浮舟とが)明け暮れおぼつかなき隔ても、おのづからあるまじきを、この春のほどに、さりぬべくは渡してむ」と思ひてのたまふも、　浮舟　六・135

c　小君「この障子口にまろは寝たらむ。風吹き通せ」とて、畳ひろげて臥す。　空蟬　一・197

次に、マシの終止用法も、あえて現実世界に定位すれば現在や未来となるかもしれないが、マシは反実仮想を表わすと言われるように、現実とは反対の内容であり、現実の時間上に位置付けるのは適当でない。やはり非現実事態と言う方が妥当である。たとえば、(4)aは、須磨の住まいは、こういう時でなかったならば、さぞかし風情もあることだろうに、(4)bは、私(雲居雁)だって、六条院の方々のように大勢で暮らす習慣になれていれば、多少のことはとりたてて問題にしないだろう、(4)cは、髭黒大将は、玉鬘との結婚は大事な宝を取ってきたような思いがする、ということである。

(4) a　所につけたる御住まひ、やう変りて、かかるをりならずは、をかしうもありなましと、(源氏は)昔の御心のすさび思し出づ。　須磨　二・179

b　上(雲居雁)はまめやかに心憂く、「…我も、昔よりしかならひなましかば、人目も馴れてなかなか過ぐしてましし。…」など、いといたう嘆いたまへり。　夕霧　四・439

c　女(玉鬘)も、塩やく煙のなびきける方をあさましと思

せど、（髭黒大将は）盗みても行きたらましと思しなずらへて、いとうれしく心地落ちゐぬ。　真木柱　三・381

ここで、ベシの終止用法、接続用法を見てみると、単純に非現実事態とは言い難い。確かに一方では、(5)aは、源氏は、お仕えする人達に適当な折を見ては便宜をはからうことをお心懸けになられたので、しあわせ人が数多くなっていくにちがいない、(5)bは、妹尼は、婿の中将に珍しくまた深い感慨もわいてくるような問わず語りをも話し出すにちがいない、(5)cは、薫は、匂宮へのお見舞いに伺わないのもすねていると見られるだろうとお思いになって参上なさる、というように、非現実事態を表わす用例も少なくない。

(5) a　（源氏は）なほ昔に御心ばへ変らず、をりふしごとに渡りたまひなどしつつ、若君の御乳母たち、さらぬ人々も、年ごろのほどまかで散らざりけるは、みなさるべき事にふれつつ、よすがつけむことを思しおきつるに、幸ひ人多くなりぬべし。　澪標　二・274

b　（中将が）たまさかにかくものしたまへるにつけても、めづらしくあはれにおぼゆべかめる問はず語りをも（妹尼は）し出でつべし。　手習　六・295

c　宮（匂宮）の御とぶらひに、日々に、参りたまはぬ人なく、（薫は）世の騒ぎとなれること、ことごとしき際ならぬ（浮舟への）思ひに籠りゐて、参らざらんもひがみたるべしと思して、参りたまふ。　蜻蛉　六・207

しかし、他方、(6)aは、源氏は、帝の寵愛の言葉に涙がこぼれ落ちそうだ、(6)bは、兵部卿宮の筆跡があまりにみごとなので、源氏は筆を棄ててしまいたくなる、(6)cは、人は皆寝てしまっているのだろう、ということであり、これらは推量とはいうものの、現実の時間上で現在に位置付けることもできそうである。恐らく、ベシの本質的な機能は、現実事態の推量であるとか、非現実事態の推量であるとかいうところにあるのではないために、場合によって現実推量であったり、非現実推量であったりするのだろう。

(6) a　中将の君（源氏）、（帝の寵愛の言葉に）面の色かはる心地して、恐ろしうも、かたじけなくも、うれしくも、あはれにも、かたがたうつろふ心地して、涙落ちぬべし。　紅葉賀　一・401

b　源氏「（兵部卿宮の筆の才能が）かうまでは思ひたまへずこそありつれ。さらに筆投げ棄てつべしや」とねたがりたまふ。　梅枝　三・411

c　奥の枢戸（くるど）も開きて、人音もせず。（源氏は）かやうにて

世の中のあやまちはするぞかしと思ひて、やをら上りてのぞきたまふ。人は皆寝たるべし。　花宴　一・426

ベシを、終止用法と接続用法のような（準）文末用法と、連体用法、準体用法そして連用用法のような文中用法とに大きく分けると、およそ文中用法には、適当、必要、義務、可能のような意味が、文末用法には、それ以外に、推量、予定、当然、命令、意志のような意味が、対応すると言ってもよいだろう。このことは、ベシの諸用法は、命題―モダリティに跨って広がっており、その表わす意味も命題側の意味とモダリティ側の意味とに分けることができる、と言えば了解しやすいかもしれない。このうち、文中用法の適当、必要、義務、可能は、非時間的な一般的事態を表わすこともできるが、完了助動詞を伴う場合には、現実時を基準時としていると解釈できそうである。たとえば、(7)a、b、cの前例は連体用法、(7)cの後例、dは連用用法であるが、(7)aは、母君は娘が川に流されて死んだことを思うと自分も川に落ち込んでしまいそうな心地がする、(7)bは、薫は悩んだり嘆いたりすることなく過ごすことのできるこの世であると思っていた、(7)cは、空蟬は、源氏が気持ちがそそられるようにお思いになるに違いない様子である、また軒端荻は夫を持ってもこれまで同様心を許すに決まっているように思われる様子である、(7)dは、侍従を末摘花と取りかえてしまいたいくらいに思われる、というようにおよそ現実の現在を基準時としたアスペクト表現であると考えてよさそうである。

(7)a　（母君は）さば、このいと荒ましと思ふ川に流れ亡せたまひにけり、と思ふに、いとど我も落ち入りぬべき心地して、母君「（浮舟が）おはしましにけむ方を尋ねて、骸をだに、はかばかしくをさめむ」とのたまへど、　蜻蛉　六・200

b　薫「人々しくきらきらしき方にははべらずとも、心に思ふことあり、嘆かしく身をもて悩むさまなどはなくて過ぐしつべきこの世と、みづから思ひたまへし。…」　宿木　五・383

c　（空蟬は）さるべきをりをりの御答へなどなつかしく聞こえつつ、なげの筆づかひにつけたる言の葉、あやしくらうたげに目とまるべきふし加へなどして、あはれと思しぬべき人のけはひなれば、（源氏は）つれなくねたきものの、忘れがたきに思す。いま一方（軒端荻）は主強くなるとも、変らずうちとけぬべく見えしさまなるを頼みて、とかく聞きたまへど、御心も動かずぞありける。　夕顔　一・220

d　（侍従は）年ごろいたうつひえたれど、なほものきよげによしあるさまして、（叔母には）かたじけなくとも、（末摘花と）とりかへつべく見ゆ。　蓬生　二・328

ここで、非現実推量の用法を持つム・マシ・ベシには、仮定用法があることが注目される。仮定用法も現実でないことを仮定するのであるから、非現実用法と言うことができる。そのうちムは、連体用法、準体用法として挙げたものはおよそ仮定の意味合いで解釈される。たとえば、(8)aは、六条御息所は、源氏との縁を断ち切って伊勢に下るとすれば、まことに心細いに違いないだろうし、世間の噂でももの笑いになるだろうとお思いになる、(8)bは、まったくこの世から亡くなってしまわれた方ならば、言っても仕方のないことで、日が経てばだんだんと忘れてゆくこともあろう、(8)cは、台風がこんなに吹き荒れてしまっては、何もできはすまい、(8)dは、とりわけ朱雀院から女三の宮についてご意向を承ってしまったということであれば、ことさら大事にお世話申し上げようとは思うが（と言いつつ結局は断る）、(8)eは、家の秘伝書などに書き留めて入れておいたら、それこそ面白かろう、(8)fは、たとえ冗談にせよ若やいだ噂が世間の人の口の端にのぼりでもしたら、それこそまことに恥ずかしく見苦しいことであろう、というように仮定の意味合いを持っている。そして、条件節は帰結節で結ぶ必要があるが、大半の用例が、破線のように、帰結節は非現実推量となっている。ここで注目されるのは、仮定条件節をとる帰結節には、ム・マシだけではなく、ベシ・マジも用いられるということである。このことはベシ・マジの少なくとも一部は非現実推量に用いられるということを意味する（マシ、マジの用例は(9)、(10)、(11)に挙げる）。

(8)a　（六条御息所は源氏の仕打ちが）つらき方に思ひはてたまへど、今はとてふり離れ（伊勢に）下りたまひなむはいと心細かりぬべく、世の人聞きも人わらへにならんことと思す。　葵　二・24

b　（紫の上は）ひたすら世に亡くなりなむは言はむ方なくて、やうやう忘れ草も生ひやすらん、（源氏がいる須磨は）聞くほど近けれど、いつまでと限りある御別れにもあらで、思すに尽きせずなむ。　須磨　二・182

c　源氏「中将の下襲か。御前の壺前栽の宴もとまりぬらむかし。かく吹き散らしてむには、何ごとかせられむ。すさまじかるべき秋なめり」などのたまひて、何にかあらむ、さまざまなるものの色どもの、いときよらなれば、かやうなる方は、南の上にも劣らずかしと思す。　野分　三・273

d　源氏「…またかくとり分きて（朱雀院から）聞きおきたてまつりてん（女三の宮）をば、ことにこそは後見きこえめと思ふを、それだにいと不定なる世の定めなさなりや」とのたまひて、　若菜上　四・33

e　源氏「いかでか。何ごとも人に異なるけぢめをば記し伝ふべきなり。家の伝へなどに書きとどめ入れたらんこそ、興はあらめ」など戯れたまふ御さまの、にほひやかにきよらなるを見たてまつるにも、　若菜上　四・136

f　（玉鬘は）みづからさへ、戯れにても、若々しき事の世に聞こえたらむこそ、いとまばゆく見苦しかるべけれと思せど、　竹河　五・97

マシの仮定用法はマシカ＋バ（上代のマセ＋バは中古の『源氏物語』にはない）となるが、これは言うまでもなく反実仮想の用法であり、非現実事態を仮定し、非現実推量で結ぶことになる(9)。aは、もし源氏と藤壺との不義の関係に気付かずにいたら、来世までの罪障となるところであった、(9)bは、式部卿宮の女婿となってお近づきにならせていただけたのでしたら、今頃幸せでしたでしょうに、(9)cは、源氏の須磨退去の幾年かを途中で拝見せずじまいになっておりましたら、残念なことであっただろう、(9)dは、もしも源氏の今日のお越しを知らずに過ごしでもいたしましたら、御不興がさらに増したでしょう、というような意味となる。

(9)a　（僧都が）やをらかしこまりてまかづるを、（帝は）召しとどめて、帝「（源氏と藤壺との関係を）心に知らで過ぎなましかば、後の世までの咎めあるべかりけることを、今まで忍びこめられたりけるをなむ、かへりてはうしろめたき心なり、と思ひぬる。またこのことを知りて漏らし伝ふるたぐひやあらむ」とのたまはす。　薄雲　二・442

b　源氏「（故式部卿宮の女婿として）さもさぶらひ馴れなましかば、今に思ふさまにはべらまし。みなさし放たせたまひて」と、恨めしげに気色ばみきこえたまふ。　朝顔　二・462

c　女五の宮「…（源氏が）かくて世にたち返りたまへる御よろこびになむ、ありし年ごろを見たてまつりさしてましかば、口惜しからまし、とおぼえはべり」と、うちわななきたまひて、　朝顔　二・461

d　内大臣「（源氏のもとに）さぶらはではあしかりぬべかりけるを、召しなきに憚りて。承り過ぐしてましかば、御勘事や添はまし」と申したまふに、　行幸　三・298

ベシの仮定用法は、連用形ベク＋ハという形をとるが、これら

も多くが非現実事態の仮定条件に対して、非現実推量で結んでいる。たとえば、⑽aは、時々こうして藤壺のもとで切ない悲しみなりとも晴らすことができますならば、どうして大それた気持ちも起こしましょうか、⑽bは、浮舟が姿形がたいしたことなく他の娘と一緒にしておいてもよいという程度であったなら、まったくなんでこれほど苦しい思いをして心を労することがあろう、⑽cは、源氏が夕顔の後を追いかけても行方が知れなくなって、それで通り一遍の女と思ってしまえるようなら、ただそれだけの気まぐれとして諦めてしまえそうだが、⑽dは、西側の部屋はむさくるしいでしょうが、それでも浮舟がお過ごしになれるようでしたら、暫くの間は（お使い下さい）、ということである（省略部分を補った⑽dの帰結節は非現実推量とはなっていないが）。

⑽a　（源氏は）せめて（藤壺に）従ひきこえざらむもかたじけなく、心恥づかしき御けはひなれば、源氏「ただかばかりにても、時時いみじき愁へをだにはるけはべりぬべくは、何のおほけなき心もはべらじ」など、たゆめきこえたまふべし。　賢木　二・103

b　（中将の君は浮舟が）さま容貌のなのめにとりまぜてもありぬべくは、いとかうしも、何かは苦しきまでももて悩ままし、同じごと思はせてもありぬべきを、ものにもまじらず、あはれにかたじけなく生ひ出でたまへば、あたらしく心苦しきものに思へり。　東屋　六・12

c　（源氏には）かりそめの隠れ処とはた見ゆめれば、（夕顔が）いづ方にも、いづ方にも、移ろひゆかむ日を何時とも知らじと思すに、追ひまどはして、なのめに思ひなしつべくは、ただかばかりのすさびにても過ぎぬべきことを、さらにさて過ぐしてんと思されず。　夕顔　一・228

d　大蟲さらば、かの西の方に、隠ろへたる所し出でて、いとむつかしげなめれど、さても過ぐいたまひつべくは、しばしのほど」と（中将の君へ）言ひつかはしつ。　東屋　六・34

また、言うまでもないことながら、順接仮定条件節の未然形＋バ、逆接仮定条件節の終止形＋トモも帰結節は原則として非現実推量となる。たとえば、⑾aは、紫の上が父宮の邸に移ってしまったら、わざわざ迎え取るとしてもそれでは浮気っぽいと言うことになるだろうし、幼い女を盗み出したという非難を免れないだろう、⑾bは、夕霧がゆくゆくは国家の重鎮となるような心構えを身に付けるなら、私（源氏）の亡き後も心配なこともなかろうと思いまして、⑾cは、あなた（紫の上）が大人になったときは、決して他へは出かけませんよ、⑾dは、たとえ見劣りする相手で

あっても、そうして一度会ってしまえば薄情なことはおできになれそうもない薫のことだから、なおさらのことかりそめにも妹の君と契りを結んだらそれで満足なさるだろう、(11)eは、源氏が「玉藻はな刈りそ」と歌い興じていらっしゃるお姿も、恋しい玉鬘に見せたら、きっと胸打たれるに違いない御有様である、(11)fは、私(薫)が面白くない気持ちになったからと浮舟を捨てておいたなら、きっと匂宮が呼び迎えられるだろう、ということである。

(11) a (惟光が)しかじか(明日紫の上が兵部卿宮に引き取られる)など聞こゆれば、(源氏は)口惜しう思して、かの宮に渡りなば、わざと迎へ出でむも、すきずきしかるべし、幼き人を盗み出でたりと、もどき負ひなむ、その前に、しばし人にも口がためて、渡してむ、と思して、

若紫　一・326

b 源氏「…(夕霧は)さし当りては心もとなきやうにはべれども、つひの世のおもしとなるべき心おきてをならひなば、(源氏が)はべらずなりなむ後もうしろやすかるべきによりなむ。…」

少女　三・16

c 源氏「我も、(紫の上に)一日も見たてまつらぬはいと苦しうこそあれど、幼くおはするほどは、心やすく思ひきこえて、まづくねくねしく怨むる人の心破らじと思ひて、むつかしければ、しばしかくもありくぞ。大人しく見なしてば、ほかへもさらに行くまじ。人の恨み負はじなど思ふも、世に長うありて、思ふさまに見えたてまつらんと思ふぞ」など、こまごまと語らひきこえたまへば、さすがに恥づかしうて、ともかくも答へきこえたまはず。

紅葉賀　一・405

d 大君「(薫が私を)せめて恨み深くは、この君(妹の中君)をおし出でむ。劣りざまならむにてだに、さても見そめてば、あさはかにはもてなすまじき心なめるを、まして、ほのかにも見そめてば慰みなむ。…」と思し構ふるを、

総角　五・234

e あづまの調べをすが掻きて、源氏「玉藻はな刈りそ」と、うたひすさびたまふも、恋しき人(玉鬘)に見せたらば、あはれ過ぐすまじき御さまなり。

真木柱　三・384

f 薫「我すさまじく思ひなりて(浮舟を)棄ておきたらば、必ずかの宮(匂宮)の呼び取りたまひてむ。…」など、なほ棄てがたく、気色見まほしくて、御文遣はす。

浮舟　六・167

逆接仮定条件節の例は以下のようなものである。ここで、(12)aの帰結節は命令文であるが、命令文も一種の非現実事態であると

了解できる。さて、⑿aは、紫の上のご定命が尽きてお亡くなりになったのだとしても、ただもう暫くの間ご猶予下さい、⑿bは、たとえあなた（朧月夜）がこの私（源氏）をお捨てになられても、必ずなさねばならぬ御回向の中には第一に私のことをお入れくださるだろう、⑿cは、朧月夜が源氏と密会しいていたのを知りながら、朱雀帝ならば穢れているからといって決してお見捨てになることもあるまいと、それだけを頼みにして、ということである。

⑿a　（源氏は）すぐれたる験者どものかぎり召し集めて、源氏「（紫の上は）限りある御命にてこの世尽きたまひぬ」とも、ただ、いましばしのどめたまへ。不動尊の御本の誓ひあり。その日数をだにかけとどめたてまつりたまへ」と、　若菜下　四・225

b　源氏「…さまざまなる世の定めなさを心に思ひつめて、（出家が朧月夜に）今まで後れきこえぬる口惜しさを、思し棄てつ」とも、避りがたき御回向の中にはまづこそは、とあはれになむ」など、多く聞こえたまへり。　若菜下　四・252

c　右大臣「…さるべきにこそはとて、（朧月夜が）世にけがれたり」とも（朱雀帝は）思し棄つまじきを頼みにて、かく本意のごとく奉りながら、…」　賢木　二・139

以上のように、非現実事態を表わす仮定節と非現実推量節とはしばしば対になって現われる。これはどのようなことを意味するだろうか。

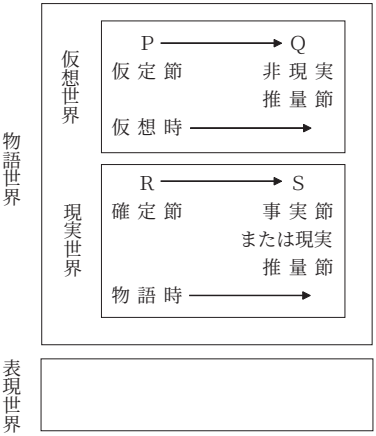
ここで、過去助動詞の表現構造について考察した、井島（二〇〇〇・九、〇二・一、〇二・三、〇五・一）を想起したい。そこでは、キ・ケリの使い分けについて考察するために、「物語世界」と「表現世界」という二つの世界を措定し、その時間的関わりのあり方によってその使い分けを理論的に分析した。ここではさらに、物語世界中での現実の出来事である「（物語中の）現実世界（＝物語世界）」と、その場の必要に応じて地の文にでも会話文にでも要請される「（物語中の）仮想世界」とを設けることにしたい。前者は、原則として物語中では全体として一貫した時間関係、空間関係、人間関係を保っている（そうでなければ、物語は破綻していることになる）のに対して、後者は、その場その場で必要に応じて物語中の現実の時間関係、空間関係、人間関係とずれた世界が要請される。場合によっては、物語中の現実とはまったく異なった世界であっても構わない。そして近接する仮想世界同士で、時間関係、空間関係、人間関係が異なっていても構わないし、むしろそうであるのが普通である。ここで、物語（中の現実）世界に流れる時間を「物語時」、表現世界に流れる時間を「表現時」と

呼んだのに倣えば、物語中の仮想世界に流れる時間を「仮想時」と呼ぶことができるだろう（理論的には、すべての仮想世界で時間関係、空間関係、人間関係が成り立っているわけではないだろうが、中古の物語の中では、大方それらが存在すると見ることができるのではないだろうか）。

そのような、物語中の現実世界と、物語中の仮想世界との中で、条件表現が用いられた場合を考えてみよう。物語中の現実世界での条件表現とは、（物語中で）現実に起こった事態と事態との因果関係のことである。その条件節（前件）を「確定節」、帰結節（後件）を「事実節」あるいは「現実推量節」と呼ぶことができるだろう。それに対して、物語中の仮想世界での条件表現とは、語り手ないし登場人物が仮想した事態と事態との因果関係のことである。その条件節を「仮定節」、帰結節を「非現実推量節」と呼ぶことができるだろう（図表二）。

そして、物語中の現実世界における確定節・事実節あるいは現実推量節それぞれに物語時現在を基準時としたアスペクト表現が可能であるように、物語中の仮想世界における仮定節・推量節それぞれに仮想時現在を基準時としたアスペクト表現が可能であると言うことができるのではないだろうか。

このように考えると、ヌ・ツの意味に、事実の描写に用いられる「完了」と、非事実の仮想に用いられる「確述」とを区別する必要はないことになる。物語中の現実世界に流れる物語時と、物語中の仮想世界に流れる仮想時という違いはあるものの、それはあくまでテンスの問題であって、ヌ・ツはまったく同じようにアスペクトとして働いていると言うことができる。



図表二

3　否定、希望・願望表現中の完了助動詞

前節に見た推量・仮定表現だけでなく、否定表現や希望・願望表現に用いられる完了助動詞も非現実用法と言うことができるだろうが、否定表現と希望・願望表現との間には、完了助動詞の出現のしかたについて、はっきりとした対立が見られる。すなわち、ズ・デ・ジ・マジのような否定を含む表現は、タリ・リの後には承接するが、ヌ・ツの後には承接しない。他方、マホシ・バヤ・ナムのような希望・願望表現は、ヌ・ツの後には承接するが、タリ・リの後には承接しない。なお、古典語文法では一語と見なされるニシカナ・テシカナも同じ振舞いをする（図表三）。

	ズ	デ	ジ	マジ	マホシ	バヤ	ナム	シカナ
ヌ	0	0	0	0	5	6	1	13
ツ	0	0	0	0	1	4	0	26
タリ	31	3	3	2	0	0	0	0
リ	8	1	0	2	0	0	0	0

図表三

このように一見対照的な分布を見せる否定表現と希望・願望表現であるが、そのような相違を生み出す理由はそれぞれ事情が異なるようである。以下それぞれについて検討を加えたい。

3・1　否定表現

最初に断っておかなければならないが、否定表現一般に言えることとして、否定までも含めた節全体が非現実用法となるわけでは必ずしもない。かえって節全体としては現実の事態を表わす方が常態であり、否定助動詞によって打ち消された内容が非現実の事態となる。

実は、否定助動詞に下接する完了助動詞については、すでに井島（二〇〇七・八）で検討した。ズに下接する完了助動詞は、ツのみであったが、この形は、他の状態表現、すなわちアリ、形容詞・形容動詞、用言＋ベシと同じく、ザリ－ツ－Φ、ザリ－ツ－ラムのような全体として実現した（と思われる）事態に用いられ、当該の事態がそれまでずっと実現してこなかったという状態がそこで〈完了〉する、すなわちそこで当該の事態が実現することを表わした。

ちなみに、完了助動詞と否定助動詞との相互承接に関して、この井島（二〇〇七・八）の結果と、本稿の図表三とを見比べると、タリ・リは否定助動詞の上に承接し、ツは否定助動詞の下に承接し、ヌは否定助動詞の上にも下にも承接しないという顕著な相違が見出される。

タリ・リ―　ズ―ツ
　　ズ

このことをどう解釈すべきだろうか。伝統的発想にのっとって、承接の上下関係が客観－主観、あるいは命題－モダリティのスケールに対応すると考え、打消助動詞を基準にして、完了助動詞の相対的位置をはかると、ツはズに対して相対的に主観あるいはモダリティ側にあるのに対して、タリ・リは相対的に客観あるいは命題側にある、ただし、ヌとズとの相対的関係はわからない、ということになってしまう。しかし、このような個別の事情を無視した画一的な議論では、完了助動詞の機能に関しても、否定助動詞の機能に関しても、何か新しい知見が得られたようには思われない。

そこでこのことを現代語と比較してみたい。現代語でもアスペクト表現と否定表現との間に似たような現象が見られる。すなわち、とりあえずタとテイルとに対するナイの承接のしかたは、タには上に（ナカッタ）、テイルには上下ともに（ナイデイル、テイナイ）承接する。

ナイ―タ
ナイ―テイル
テイル―　ナイ

そこで、アスペクト用法としてのタとテイルとに関して、ナイが下接することが可能かどうかを検討してみる。テイルは⒀ａに見るように直接否定することが可能であるが、タは⒁ａのように直接否定することはできず（そもそもタには未然形がないので当然のことではあるが）、⒁ｂのようにテイナイが用いられる。ここで、⒁ｃのようにテナイを用いることもでき、このテがタの未然形相当ではないか、という反論があるかもしれないが、⒀ｂのようにテイルの否定としてもテナイが用いられることからしても、⒁ｃのテナイは⒁ｂのテイナイとほぼ同機能の用法であると考えられる。

⒀Ｑ：　雨は降っていますか。
　Ａ：ａ　雨は降っていません。
　　ｂ　雨は降ってません。
⒁Ｑ：　雨は止みましたか。
　Ａ：ａ＊雨は止んだません。
　　ｂ　雨は止んでいません。
　　ｃ　雨は止んでません。

それに対して、ナイが上接したタ・テイルは、アスペクト用法とは言えないようである。ナカッタのタは⒂ａのようにテンス用法となり、ナイ－デイルは⒂ｂのように〈意志性〉を感じさせるな

どのことからしても、本動詞に近い用法である。

(15) a　花子は昨日夕ご飯を食べなかった。

b　花子は夫が帰るまで夕ご飯を食べない でいる。

結局、現代語では、アスペクト用法としてはテイルにナイが下接するものしかないということになる。

テイル―ナイ

このように、現代語と考え合わせると、また異なった解釈ができるように思われる。完了助動詞の前にズが承接しうるのはツしかないが、井島（二〇〇七・八）で見たように、ザリ―ツは〝否定的状態〟の〈完了〉（すなわち、かえって否定されていた事態の〈発生〉を表わしていた。すなわち、ズはそれが承接した内容を打ち消して全体として〝否定的状態〟という事態を構成していることになる。また、ヌおよびタリ・リの前にはズが承接しないのは、形容詞・形容動詞などの状態述語にヌおよびタリ・リが承接しないのと同様に、ズによって構成された内容が〝否定的状態〟であるからであると思われる。古典語のアスペクト・システムは、動作だけでなく状態も含めた事態を基礎にした事態アスペクトであったので、否定的事態を表わす～ズにツの承接を許したが、現代語は動作を基礎に据えた動作アスペクトであるので、～ナイに完了のタは下接することができない。

他方、完了助動詞の後にズが承接しうるのはタリ・リしかないが、これは当該時点で当該の事態が〈経過〉中（〈動作の進行〉・〈結果の存続〉を合わせて）ではない、とは言えても、当該時点で当該の事態が丁度〈発生〉あるいは〈完了〉したわけではない、というような表現は不自然であるからであるというように説明できるかもしれない。

タリ・リにズが下接する場合について、近藤（二〇〇三・三）では、裸形と比較して、「リ・タリ＋否定辞」は、特定の時点で（結果状態であれ単純状態であれ）ある状態にない（場合によっては―否定推量・否定意志・不可能表現など―その状態が続かない）ことを表し、「非リ・タリ＋否定辞」は、ある状態をもたらす変化・動作が、特定の時点までにない（場合によっては、特定の時点以降起きない）ことを表す、というアスペクト的な相違が認められる」と論じる。ここでタリ・リ承接の場合は「特定の時点で…ある状態にない」と述べているところが注目される。すなわち、アスペクト表現一般が、基準時において当該事態の時間的展開のどの段階（局面）にあるかを表わすものである、とする本稿の議論と一致する。ただ、ここではタリ・リにズが下接する場合に限って指摘されているが、これはアスペクト表現一般の持つ特徴であろう。

それはさておき、実際にタリ・リにズが下接する場合には、(16)a～dのように、地の文の場合には物語時現在における、会話文の場合には語られている一連の出来事のその時点において、当該事態の展開がその段階にないことを表わしているようである。実際、(16)aは、愚かな女は、こんなにめったにしか来てくれない人とさえ怪しむわけではなく、(16)bは、紫の上は、源氏の懐にお抱かれになっても、隔てがましく恥ずかしいともまるで思っていない、(16)cは、明石の上は、お産みになった姫君を自分のそばにひきつけておいてみすぼらしくするでなく、(16)dは、かえって末摘花のほうはそうもお思いにならずに、というような意味となる。

(16) a 中宜「…（愚かな女は）頼むにつけては、うらめしと思ふこともあらむと、心ながらおぼゆるをりをりもはべりしを、見知らぬやうにて、久しきとだえをもかうたまさかなる人とも思ひたらず、ただ朝夕にもてつけたらむありさまに見えて、心苦しかりしかば、頼めわたることなどもありきかし。…」　帚木　一・157

b （源氏が）ものより（よそから）おはすれば、（紫の上は）まづ出でむかひて、あはれにうち語らひ、御懐に入りゐて、いささかうとく恥づかしとも思ひたらず。　若紫　一・336

c 大宜「…（源氏が）老の世に、持たまへらぬ女子を（明石の君は）まうけさせたてまつりて、身に添へてもやつしゐたらず、やむごとなき（紫の上）にゆづれる心おきて、事もなかるべき人なりとぞ聞きはべる」など、かつ御物語聞こえたまふ。　少女　三・29

d なかなか女（末摘花）はさしも思したらず、今はかくあはれに長き（源氏の）御心のほどを穏しきものに、うちとけ頼みきこえたまへる御さまあはれなり。　初音　三・148

さて、ここまでヌ・ツは否定表現が下接しないと論じてきた。確かに『源氏物語』にはそのような用例は見出されない。しかし、そのような用例が和歌集を中心に僅かに見出されることは、近藤（一九八六・三、八九・一二）に指摘されている。しかしながら、ツ－ズの用例は、(17)a～cのようにヤハ～ヌの形の反語になって、結局、希望などの肯定的な意味になる。

(17) a はるのくれに、かれこれ花おしみける所にて
かくながらちらで世をやはつくしてぬ花のときはもありと見るべく　『後撰和歌集』巻三　九五

b 道しらでやみはしなぬ相坂の関のあなたは海といふなり　「同」巻十一　七八七

c　くにとき、「ふぢつぼの御かたをや、いまはおろし給てぬ」。（異本「給はぬ」）

『宇津保物語』内侍のかみ　四五五

また、ヌ－デの用例は、⑱aは、離れればいいのに離れないで、⑱bは、濡れた衣を脱ぎ代えるべきなのに脱ぎ代えないで、⑱cは、消えてしまえばよかったのに消えないで、と解釈されることなどから、「ヌ＋デが使われるのは、動作・作用が実際には実現していないが、実現への志向を話し手・詠み手が持っている場合である」と論じる。

⑱a　見るめなきわが身をうらとしらねばやかれなであまのあしたゆくくる

小野小町

『古今和歌集』巻十三　六二三

（『伊勢物語』第二七段　129）

b　くらもちの皇子「…さらに潮に濡れたる衣をだに脱ぎかへなでなん、こちまうで来つる」とのたまへば、

『竹取物語』39

c　かひもなき草の枕にをくつゆの何にきえなでおちとまりけむ

『後撰和歌集』巻十八　一二八六

このように、否定表現は用いられるものの、肯定的な主張を行う場合に用いられるものばかりであり、最終的に「ツ・ヌには否定判断を表す語が下接しないという原則は非常に強固なものである」と結論付けているが、従うべきであろう。

3・2　希望・願望表現

次に、希望・願望表現に用いられる完了助動詞の働きについて検討してみたい。希望・願望表現には、どうしてタリ・リが用いられないのであろうか。ある時点で当該事態が〈発生〉することか〈完了〉することを望むことは自然であるが、ある時点で当該事態が〈経過〉中であることを望むということは、不自然なことなのではないだろうか。

ところで、希望・願望表現も、希望・願望する非現実事態を仮想世界の中で思い描くものであると考えられる。であるとすれば、ここに完了助動詞が用いられても何の問題もない。振り返れば、ムやベシが未来に起こりそうな出来事を推量する場合には、あえて仮想世界などというものを設けなくても、現実世界における未来に基準時を置いて完了表現が用いられているという了解もとりあえず不可能ではない。しかしながら、マシが表わす反実仮想はそもそも現実とは異なる事態を想定するものであるし、意志・勧誘やこの希望・願望などは、そうしよう、そうしたい、そうあってほしいという話し手（あるいは語り手）の情意を表わすもので

あり、現実に将来そうなるという保証は何もない。したがって、現実世界に流れる現実時を基準時にとるのは不適当と言わざるを得ない。むしろ話し手（あるいは語り手）の心内に想定された仮想世界に流れる仮想時を基準時とした完了表現であると了解する方がふさわしいのではないだろうか。このことは、未来に起こりそうな出来事を推量する場合にもあてはまる。

さて、⑰a～fがナ－バヤ、⑮a～dがテ－バヤ、⑯がナ－ナムの全例である（テ－ナムの用例はない）。これらが承接する動詞は、ナ－バヤは「やむ」（二例）、「出づ」、「隠る」、「籠もりゐる」、「成る」（以上、各一例）の計六例、テ－バヤは「失ふ」（三例）、「（罪失ふさまに）す」（一例、「失ふ」に準ずる）の計四例、ナ－ナムは「消ゆ」の計一例であり、ヌ・ツとの承接に関しては実現事態の場合と共通する。

⑲aは、源氏は、源典侍との逢瀬から誰とも知られずに逃げ出してしまいたいとお思いになる、⑲bは、柏木は、女三の宮をどこかへ連れ出して隠し、自分自身はどこかへ姿をくらましてしまいたいとまで思い乱れた、⑲cは、女三の宮は、我が身の運が辛くて、いっそ尼になってしまいと言うお気持ちになられた、⑲dは、薫は、中の宮が無心に寝入っているのを見て、一緒に隠れてしまいたいと思う、⑲eは、中の君は、そっと山里へ引き籠もってしまいたいというお気持ちをほのめかす、⑲fは、浮舟は、ひたすらにもうこの世にはいないものとして、誰に見られも聞かれもせず忘れられたままで終わってしまいたいものと思う、ということである。

⑲a　（源氏は）誰と知られで出でなばやと思せど、しどけなき姿にて、冠などうちゆがめて走らむ後手思ふに、いとをこなるべしと思しやすらふ。　紅葉賀　一・414

b　（柏木は）さかしく思ひしづむる心もうせて、（女三の宮を）いづちもいづちも率て隠したてまつりて、わが身も世に経るさまならず、跡絶えてやみなばや、とまで思ひ乱れぬ。　若菜下　四・217

c　（女三の宮は）片耳に聞きたまひて、（源氏が）さのみこそは思し隔つることもまさらめ、と恨めしう、わが身つらくて、尼にもなりなばやの御心つきぬ。柏木　四・291

d　（中の宮が）何心もなく寝入りたまへるを、（薫は）いといとほしく、いかにするわざぞと胸つぶれて、もとろもに隠れなばやと思へど、さもえたち返らで、　総角　五・242

e　かようなるついで（故宮の三回忌）にことつけて、（中の宮は）やをら籠りゐなばやなどおもむけたまへる気色な

れば、薫「いとあるまじき事なり。なほ何ごとも心のどかに思しなせ」と教へきこえたまふ。　宿木　五・388

f　（浮舟は）限りなくうき身なりけり、と見はててし命さへ、あさましう長くて、いかなるさまにさすらふべきならむ、ひたぶるに亡きものと人に見聞き棄てられてもやみなばや、と思ひ臥したまへるに、　手習　六・305

⑳aは、宿直人は、気味が悪いほど人が驚く薫の衣の匂いをなくしてしまいたいと思う、⑳bは、薫は、宇治の邸を寺にして罪滅ぼしになるようにしたいと思う、⑳cは、浮舟は、弁の尼と母君との話を聞いてやはりこの身をなきものにしてしまいたいと思う、⑳dは、浮舟が「この身を失くしてしまいたい」と言って泣き入る、ということである。

⑳a　（宿直人は）心にまかせて身をやすくもふるまはれず、いとむくつけきまで人のおどろく（薫の衣の）匂ひを、失ひてばやと思へど、ところせき人の御移り香にて、えも濯ぎ棄てぬぞ、あまりなるや。　橋姫　五・144

b　薫「…（山里の邸を）時々見たまふるにつけては、心まどひの絶えせぬもあいなきに、罪失ふさまになしてばや、となん思ひたまふるを、（中の君は）またいかが思しおきつらん。…」　宿木　五・387

c　（浮舟は）なほ、わが身を失ひてばや、つひに聞きにくきことは出で来なむ、と思ひつづくるに、浮舟　六・159

d　侍従などこそ、（浮舟の）日ごろの御気色思ひ出で、「身を失ひてばや」など泣き入りたまひしをりをりのありさま、書きおきたまへる文をも見るに、「亡き影に」と書きすさびたまへるものの、硯の下にありけるを見つけて、　蜻蛉　六・199

㉑は、明け方の薄暗がりの空に辛い我が身は消えてしまいたい、ということである。

㉑　玄三の宮　あけぐれの空にうき身は消えなんなん夢なりけりと見てもやむべく

とはかなげにのたまふ声の、若くをかしげなるを、聞きさすやうにて出でぬる魂は、まことに身を離れてとまりぬる心地す。　若菜下　四・220

希望助動詞マホシを用いた場合も事情は同じである。㉒aは、源氏は、典侍をおいてそのまま立ち去ってしまいたかった、㉒bは、内大臣は、このつまらない世の中では何か心を満たしてくれそうなことをして過ごしたいものだ、とおっしゃった、㉒cは、玉鬘は、こうして情けないことばかりなので、昨夜の風に連れられてどこかへ行ってしまいたい、と機嫌を損ねた、㉒dは、匂宮は、

いじらしかった中の君の様子を思い出してもう一度引き返したいとお思いになった、ということである。

(22) a 源氏人妻はあなわづらはし東屋の真屋のあまりも馴れじとぞ思ふ

とてうち過ぎなまほしけれど、あまりはしたなくや、と思ひかへして、人（典侍）に従へば、すこしはやりかなる戯れ言など言ひかはして、これもめづらしき心地ぞしたまふ。　紅葉賀　一・412

b 内大臣「大殿（源氏）も、かやうの御遊び（管弦の遊び）に心とどめたまひて、いそがしき御政どもをばのがれたまふなりけり。げに、あぢきなき世に、心のゆくわざをしてこそ、過ぐしはべりなまほしけれ」などのたまひて、　少女　三・32

c （玉鬘が）たへずうたてと思ひて、玉鬘「かう心憂ければこそ、今宵の風にもあくがれなまほしくはべりつれ」と、むつがりたまへば、　野分　三・270

d （匂宮は）道すがら、（中の君の）心苦しかりつる御気色を思し出でつつ、たちも返りなまほしく、さまあしきまで思せど、世の聞こえを忍びて帰らせたまふほどに、えたはやすくも紛れさせたまはず。　総角　五・275

(23)は、源氏は、紫の上の葬儀に際し悲しさに紛れて、昔からの出家の本意を遂げてしまいたいとお思いになる、ということである。

(23) （源氏は）世の中思しつづくるにいとど厭はしくいみじければ、後るとても幾世かは経べき、かかる悲しさの紛れに、昔よりの御本意も遂げてまほしく思ほせど、心弱き後の譏りを思せば、このほどを過ぐさんとしたまふに、胸のせきあぐるぞたへがたかりける。　御法　四・497

ニシガナ・テシガナも同様である。(24)aは、源氏は六条御息所に、胸の中にわだかまっている思いを晴らしとうございます、と言った、(24)bは、源氏は、六条院に玉鬘のような美しい姫がいると何とか人に知らせて、蛍兵部卿宮などのこの邸の中が気に入っておいでの方のお心を騒がせたい、と言った、(24)cは、玉鬘は、実の父親である内大臣に自分が内大臣の実子であると知っていただきたいものだ、と人知れず心に思う、ということである。

(24) a （源氏は）いとものしと思して、源氏「かうやうの歩きも、今はつきなきほどになりにてはべるを（御息所が）思ほし知らば、かう、注連の外にはもてなしたまはで。いぶせうはべることをもあきらめはべりにしがな」と、まめやかに聞こえたまへば、　賢木　二・78

b　源氏「…かかるもの（玉鬘）ありと、いかで人に知らせて、兵部卿宮（蛍兵部卿宮）などの、この籬の内好ましうしたまふ心乱りにしがな。…」　玉鬘　三・125

c　内の大殿の君たち（柏木など内大臣の若君たち）は、この君（夕霧）に引かれて、よろづに気色ばみ、わび歩くを、（玉鬘は）その方のあはれにはあらで、下に心苦しう、実の親（内大臣）にさも知られたてまつりにしがなと、人知れぬ心にかけたまへれど、　胡蝶　三・167

(25)aは、末摘花の叔母は、末摘花を自分の娘たちの召使いにしてやりたいものだと思う、(25)bは、源氏は、紫の上の心が引き付けられるほどの遊びをしたいものだ、どうかして考えていることを実現したい、とお話しになった、(25)cは、源氏は、皆さんがこちらにお集まりになっている機会にぜひ楽器の音色を確かめてみたいものだ、とおっしゃった、ということである。

(25)　a　末摘花の叔母「わがかく劣りのさまにて、あなづらはしく思はれたりしを、いかでかかる世の末に、この君（末摘花）を、わがむすめどもの使ひ人になしてしがな。心ばせなどの古びたる方こそあれ、いとうしろやすき後見ならむ」と思ひて、　蓬生　二・323

b　女君（紫の上）に、源氏「女御（斎宮の女御）の、秋に心を寄せたまへりしもあはれに、君（紫の上）の、春の曙に心しめたまへるもことわりにこそあれ。時々につけたる木草の花に寄せても、御心とまるばかりの遊びなどしてしがな」と、「公私の営みしげき身こそふさはしからね、いかで思ふことしてしがな」と、「ただ、御ためさうざうしくやと思ふこそ心苦しけれ」など語らひきこえたまふ。　薄雲　二・455

c　万春楽、御口ずさびにのたまひて、源氏「人々のこなたに集ひたまへるついでに、いかで物の音試みてしがな。私の後宴あるべし」とのたまひて、　初音　三・154

以上のように、希望・願望表現に用いられた完了助動詞は、非現実事態を表わしていると了解することができる。

おわりに

本稿では、完了助動詞に非現実用法があるということが、完了助動詞がアスペクトを表わしているということの反証にはならないことを中心に論じてきた。そのために、井島（二〇〇〇・九、〇二・一、〇二・三、〇五・一）で過去助動詞の分析のために設けた「物語世界」と「表現世界」とに倣って、新たに「仮想世界」という概念を設けた。この概念は、推量助動詞を分析するためにも

有効な概念であると考えられるが、それについては稿を改めて論じたい。

資料（『源氏物語』以外のもの）

竹取物語：武藤本・伊勢物語：三条西家本『日本古典文学大系』岩波書店、古今和歌集：元永本　築島裕編『元永本古今和歌集総索引』汲古書院、後撰和歌集：天福本『後撰和歌集総索引』大阪女子大学、宇津保物語『うつほ物語の総合研究1本文篇・索引編』勉誠出版

参考文献（第1節に挙げた文典類は割愛する）

佐藤　良雄（一九六二・一二）「文典用語の相互影響―特に動詞過去の用語について―」『日本大学人文科学研究所研究紀要』第四号

高橋　太郎（一九七六・五）「日本語動詞のアスペクト研究小史」金田一春彦編『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房

近藤　明（一九八四・一二）「助動詞『り』『たり』の活用形の偏在をめぐって」『国語学研究』第二十四集（東北大学）

近藤　明（一九八六・三）「助動詞『つ』『ぬ』の否定法・接続法・中止法」『山形女子短期大学紀要』第十八号

近藤　明（一九八九・一二）「助動詞『ツ』『ヌ』に否定辞が下接する場合」『国語学研究』第二十九集（東北大学）

内藤　聡子（一九九〇・七）「『源氏物語』における『つべし』『ぬべし』」『愛知大学国文学』第三十号

山田　潔（一九九五・一）「複合助動詞『つらう』の用法」『学苑』第六百六十一号（昭和女子大学）

井島　正博（二〇〇〇・九）「物語の時間」『国文学　解釈と教材の研究』第四十五巻第九号

井島　正博（二〇〇二・一）「中古語過去助動詞の機能」『国語と国文学』第七十九巻第一号

井島　正博（二〇〇二・三）「中古和文の類型」『日本語文法』第二巻第一号

三宅　清（二〇〇二・三）「古代語の複合辞に関する一考察―『つらむ』と『つらう』―」『学芸国語国文学』第三十四号（東京学芸大学）

近藤　明（二〇〇三・三）「助動詞『リ・タリ』に否定辞が下接する場合」『国語学研究』第四十二集（東北大学）

井島　正博（二〇〇五・一）「中古和文の時制と語り―『今は昔』の解釈におよぶ―」『日本語学』第二十四巻第一号

井島　正博（二〇〇五・一一）「中古語存続助動詞の機能」『国語と国文学』第八十二巻第十一号

井島　正博（二〇〇七・八）「中古語完了助動詞の体系」『国語と国文学』第八十四巻第八号

井島　正博（二〇〇七・一一）「中古語完了助動詞と動詞の自他」『武蔵大学人文学会雑誌』第三十六巻第二号

（いじま　まさひろ　本学非常勤講師　東京大学大学院准教授）